

第1章 「教育に活用されている馬」

教育

馬の専門機関と連携した養護教育活動

長野県立木曾養護学校

生き生きと自立した子どもたちの成長と在来馬の活用



活動の概要

木曾養護学校（長野県木曾町）は、児童・生徒一人ひとりの自立への願いに立って「自らの力でたくましく社会で生きぬくことのできる丈夫で心豊かな子ども」を育てることをめざしている。

木曾地方は日本在来馬の一種である木曾馬の産地であり、馬への関心が高いことと、近くに木曾馬の里・木曾馬乗馬センター（一般財団法人開田高原振興公社）が存在し、連携が図れることから、馬を活用した活動を教育の柱に取り入れている。



木曾養護学校内の様子

「定期的な馬の学習」

馬を使った活動は開校当初から校外学習や現場実習など行われていたが、平成12年に特色ある教育活動として「定期的な馬の学習」が教育課程に位置づけられた。

「定期的な馬の学習」に参加する児童生徒は、週1回木曾馬乗馬センターで乗馬やえさやり、厩舎掃除などを行っている。馬の学習に参加することで教育的効果が期待できそうな児童生徒について本人や保護者と相談の上、決定し実施している。乗馬や厩務作業、ブラッシングや引き馬など、一人ひとりの自立活動のねらいに合わせ学習内容が決められている。

活動時間は1人につき約20分であることから、午前8名、午後6名を上限として実施している。半期ごとに一人ひとりのねらいと実態の見直しを行い、参加者各人の改善が見込まれたところで次の参加希望者と交代する方法をとっている。
○「定期的な馬の学習」の実施例（状況に応じて変更）

騎乗者は通常の座位にて行う。馬の歩様はかなりゆっくりとした常歩で、手前は換えない。馬の静止状態であおむけ乗りや後ろ向き乗りをしたり、丸めたタオルを抱きながら乗ったりする。基本的なスピードは騎乗者の生活スピードで行うため、肢体不自由の利用者等はゆっくり行うことが多い。自閉症等の利用者の一部でゆっくりとした歩様に飽きがみられることもあり、ときに速歩

を入れることもあるが、あまりスピードを上げすぎないように注意する。手前の変更は騎乗者の身体のバランス（特定方向への傾き）などを見て適宜行う。タオルは騎乗姿勢補助具として利用するほか、馬の毛にアレルギーのある利用者対策としても使うことがある。



木曾馬乗馬センターにおける乗馬学習

○活動の成果

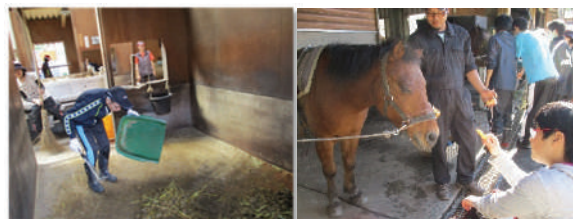
馬とのふれあいを通じて、日頃は消極的な子が積極的になってきたことに教師も驚いている。木曾馬の里に出かけるときは、乗馬の前日から嬉しそうな様子が見られ、当日は早くから支度をしてリュックを背負い、玄関でバスを待ち、楽しみにしている様子が見られる。日常的に気分が波があり不安定な児童生徒もいるが、馬の授業に出かけ馬に触ると安定することも多く見られる。

厩舎掃除は、掃除の仕方・道具の扱い方の学習

機会として、また、待ち時間の調整や、好きな仕事と苦手な仕事を上手く組み合わせてモチベーションを保つことなどにも役立っている。作業は、基本的にはスタッフの付き添いのもとで、小・中学部は一人1馬房、高等部生は一人で2馬房を分担する。年間20回ほど行っている活動の中で、個々の能力に合わせ、また、作業の目的に応じて馬房数の増減が行われる。児童生徒の実態や願い（ねらい）によって、厩舎掃除を行わない児童生徒や、逆に厩舎掃除を重点的に行う児童生徒もいる。半期10回あるいは年間20回通して継続して行う中で、掃除の手順を覚えてスムーズに掃除を行う姿、道具の扱い方に慣れて学校生活でも箒やちりとりでの扱い方が上手になっていく姿、馬房や部屋が綺麗になることで満足感・達成感を得てスタッフや教師に笑顔で報告する姿などが多く見られてきている。

参加者が乗馬の現地に行くまでの過程も重要な意味がある。バスで30分かかって向かう行程での時間の共有と、学校と木曾馬の里との標高差（約400m）が良い刺激になっていることも考えられる。現地到着前の道で下車して、馬の里まで50分程かけて歩くことによる運動機能トレーニングや、教師と2人で向かう間のコミュニケーショントレーニングも行っている。

重度重複障がい者へのストレッチと運動30分（別室を借りて）も併行して行われている。



馬房の清掃（左）と乗馬後の餌やり（右）

「校外学習」

各部・各学級の計画を立て、児童生徒全員が馬

第1章 「教育に活用されている馬」

とかかわる体験を行っている。自分でにんじんを切ってえさやりをしたり、ブラッシングをするなど、馬に乗る以外の楽しみを見つけていることも多い。

活動体制

木曾養護学校は40名以上の教職員から構成されている。児童・生徒が馬の学習に参加するかどうかなど、またどのような学習に参加するかについて、本人と保護者、教師との間で相談して決める体制になっている。また、児童・生徒の気持ちの理解、馬を介在させる効果への理解を深めるために、4月に職員研修（現場体験など）を行っている。それぞれの児童・生徒の目標に沿った教育プログラムを考え、理想に近づけられるよう工夫し、馬とのふれあいや乗馬では木曾馬の里・木曾馬乗馬センターのスタッフとの打ち合わせや意見交換を随時行っている。

「定期的な馬の学習」の参加費用は一人1回700円であるが、まとまった期間の費用では半期7,000円、通年14,000円としている。

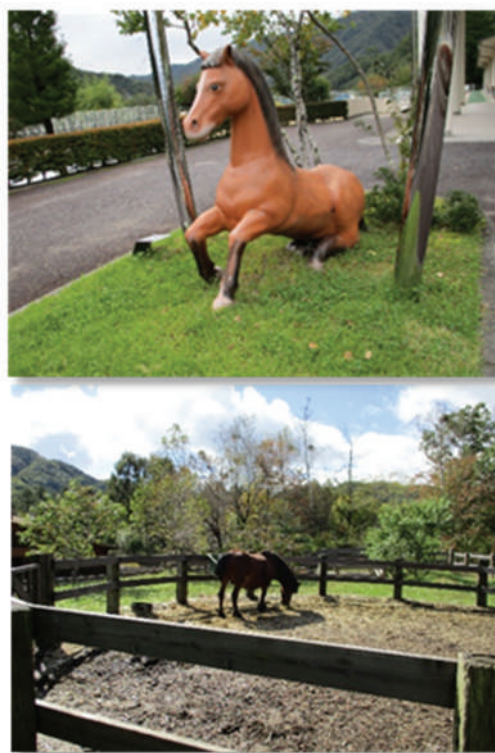
騎乗の際は、馬の扱いになれた木曾馬の里・木曾馬乗馬センターのスタッフに指導（リーダー）をお願いし、サイドの介助は養護学校の教師が行っている。

施設の概要

木曾養護学校（福山文子校長）は平成8年に開校された教育施設で、現在小学部・中学部・高等部合わせて41名（寄宿生10名を含む）が在籍している。木曾という土地柄「駒の子祭」「馬の学習」など馬の名前が付いたイベントや日常活動が行われている。

木曾馬の里・木曾馬乗馬センターは、日本在来馬である木曾馬の保存と活用を基本目的として、

木曾町と一般財団法人開田高原振興公社が運営し、約50ヘクタールの土地を利用して活動を行っている。馬は木曾町所有の木曾馬15頭および公社所属の木曾馬8頭、保存会所属8頭など計34頭が預託管理されている（木曾町からの預託料1,700万円/年）。公社では職員5名が馬や施設の管理業務を担っている。センターでは木曾馬の保存のための繁殖も行っており、年間5頭前後の子馬が生産されている。大学等との連携により、木曾馬の保存に向けた研究と事業を進めている。



木曾養護学校のモニュメント（上）と
木曾馬乗馬センターの馬場の一部

背景（地域連携、展望等）

木曾地方は源平の昔から木曾谷の街道筋や村々で木曾駒を飼育しており、牧も増えたことから、明治に至るまで有力な馬産地として知られており、木曾駒はわが国の栄枯盛衰の歴史と農業・運搬の発展史に深く関わっていた。そのため、木

曾地方では馬に対する特別な思い入れがある。

木曾馬は貴重な日本の固有資源である日本在来馬8品種のうちの一つである。かつては全国で多くの日本在来馬が存在していたが多くは絶滅してしまっている。現在まで木曾馬が保存されていることも木曾地方の人々の馬への強い思いがうかがえる。木曾馬は我が国で現在150頭ほどが飼養されているが、保存のみならず活用することが重要である。

そのような馬に関わる歴史のある地域で、教育機関である木曾養護学校と馬の専門施設である馬の里・木曾馬乗馬センターとが一体となって、木曾馬の利活用を実践していることは有意義なことである。

乗馬センターでも、馬や施設を提供するだけでなく、学校側から推薦された児童・生徒をあらかじめ学校まで視察に行き、日頃の生活をチェックして、養護学校の教育課程や個別の指導計画を基本にしつつ、馬との取り組みのプログラムを教師と協働で作成している。このような活動を通じて、養護学校の教師と障がい者とのコミュニケーションの改善の一助になることを願っている。

馬が木曾馬のみと限定されているという特徴を活かして、様々な用具を工夫することや、乗馬プログラムへの応用方法を考えている。手づくりの和風ポロクラブと和紙の玉を使っのリーチ

運動(身体の伸長運動)をはじめ、騎乗者の姿勢を制御するための道具に和鞍の一部の木製道具を応用するなど、多くの創意工夫を試みている。

また、よりよいプログラムを作成し実施する上で、教師が馬をより専門的に理解をすることが重要であると考え、年1回、教員を対象とした研修プログラムを実施するほか、学内で行われる馬の学習の事例発表会にも乗馬センタースタッフが参加し、各利用児童生徒に馬が必要かどうか、馬を用いて何ができるかを一緒に考えてもらう機会を設けているなど、日常的に連携を密にしている。

教育の専門機関と馬の専門機関が日常的に共同することで、養護教育と在来馬の活用に成果を上げている一つのモデルケースであり、今後ともこのような双方向の活動が維持、発展することが望まれる。

.....

○長野県立木曾養護学校
〒397-0001 木曾郡木曾町福島
(URL) <http://www.nagano-c.ed.jp/kisoyou/>
(TEL) 0264-22-3553

○開田高原振興公社 木曾馬の里・木曾馬乗馬センター
〒397-0301 長野県木曾郡木曾町開田高原末川 5596-1
(URL) <http://www.kisoumanosato.or.jp>